

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。



京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」・
「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」



亀岡フィールドステーション

保津川の世界遺産活動の歩みと今後①

亀岡 FS 豊田知八

2007年、亀岡市に発足した「保津川の世界遺産登録をめざす会」は今年で活動7年目を迎える。10年という期限年数を設けて活動が開始された同会の、これまでの歩みを検証し、今後有効と思われる取り組みを考えていきたい。

2006年の保津川開削400周年記念事業は地元住民が保津川を見直す機会となった。事業実施母体となった実行委員会は同記念事業の解散式で、「保津川は市民共有の財産」という気運が高まっている中、事業終了後も引き続き、活動を継続していく意向が発表された。その母体となる組織の発足とともに、活動目標として「保津川の世界遺産をめざす！」ことが掲げられ、翌年の2007年に「保津川の世界遺産登録をめざす会」が誕生する。メンバーは地元商工会や行政など記念事業から継続するものと新たに市民公募が行われた。

会は発足後、世界遺産に関する基本的知識を学ぶ勉強会を繰り返し、保津川の世界遺産登録の可能性や手順、必要な取り組みについての検討作業に入った。

そして2008年には当時の船大工を招き、保津川の伝統的な「木造船の復元」に着手し、翌年に完成。40年ぶりに木造高瀬舟^[1]が乗船客を乗せて保津峡を流下し、嵐山までの漚船に成功した。この事業はイベント的な意味合いも大きいとその主旨とするところは、途絶えていた保津川高瀬舟の造船および漚船技術の継承と記録にあった。ちなみに船名は市民公募で「世界遺産保津丸」と名づけられた。

さらにこの木造高瀬舟を使用し保津峡での「曳舟」再現事業に着手した。曳舟とは保津川下りで昭和23年頃まで行われていた舟の帰路作業で、下った舟は人力により川を逆流して出発点まで戻す作業のこと。今も保津峡に現存する綱道を使用し、当時の曳綱で木造船の曳あげ作業を再現した。また曳綱が大岩に絡まないように施工



写真：木造高瀬舟「世界遺産保津丸」

した「綱はじき」^[2]も当時と同じく竹を材料に再現した。この事業の目的も木造船造船同様で60年前に途絶えた曳舟技術の継承と記録にあった。これらの活動記録は「保津川船頭の民俗技術 曳舟・川作」と題したDVDと冊子を製作し一般に販売されている（販売元：保津川の世界遺産登録をめざす会）。特にDVDは完成度が高く、保津川遊船の広告営業活動など、広く保津川舟運文化を伝えるツールとして使用されている。また同会では年に一度、保津川シンポジウムも開催し、市民と広く知識と情報を共有する活動も進めている。

川の自然景観のみならず、船頭伝統の技の開発と継承、そして独特の生活様式から生まれた集落の景観と暮らしといった、川、山とのつながりの中で、生存基盤を確立してきた流域集落そのものが、今後も守り継承されるべき世界遺産の価値があると考えている。また、世界遺産登録をめざす活動を推進することが、川と人のつながりを見直すことにもなる。四季折々に表情を変える美しい景観の保津峡、数億年前の古生層が見られる断崖を縫って蛇行する保津川の舟運操船術とともに、流域集落の環境や暮らしを「文化的景観」としての検証をすすめ、暫定リスト入りへの条件を満たしていきたい。

[1] 河川や浅海を航行するための船底が平らな木造船。河川の波をかわすため船先が上方を向いている。

[2] 舟を曳き上げる際、綱が岩の内面に引っかかり進めなくなるため、引っかかる所に竹を這わせて立て掛け、綱が滑り、岩を越す役割をする人工的な構造物。

在所の暮らし 屋号と焼き印①

守山 FS 藤井美穂

一般に、屋号¹⁾は先祖の名前や仕事、その家の位置や建っているところにそってつけられる場合が多い。屋号を知ることで、在所やそれぞれの家の歴史がみえてくるといえる。今回は屋号と焼き印について、Aさんとの在所での調査の様子を交えて述べてたい。

在所の農具には焼き印が押されている。焼き印について、本ニューズレター No.57 で触れた。在所の人々は焼き印を「焼きば



写真1：K家の焼き印 全長32.5cm、握り手の長さ10.5cm

ん」または「はん」と呼んでいる。一般に、焼き印を押すことを「はんを押す」と言う。焼き印の長さは約30cmで握り手は約10cmである(写真1)。

在所の調査はAさん(1926年生 男性)の協力を得て行っている。焼き印について調べる際に、Aさんは在所の屋号をもとにして各家をまわった。

「小さい時分から、物心ついた頃かな。在所には数字にうまいように合うてる屋号があって、歌みたいにしてゆうてた(言っていた)。そやから記憶に残っているんやな」(A氏)。

開発集落のほとんどの家には屋号があるが、上に記したA氏が記憶している屋号とは一から十までを表したものである。それらの数に「千、万、兆」を加えて、計13の屋号となる。A氏は在所のこれらの屋号が、1から兆までの数字の語呂合わせになっている面白さと「すごさ」を在所の子供会で話したことがあったという。

「まあ、こんな屋号がある在所は、全国でここだけとちゃうやろか」(A氏)。このように在所の屋号はA氏にとって、誇るべき特別なものである。だが、屋号の由来については分からないと言う。

表1：開発集落の屋号の一例

数字	屋号：呼び名	屋号：漢字
一	イチザエモン	市左エ門
二	ニザエモン	仁左エ門
三	サンザエモン	三在エ門
四	シロヨモン	四郎ヲ門
五	ゴヨモン	五与門
六	ロクヨモン	六与門
七	ヒコヨモン	彦与門
八	ハチベエ	八兵衛
九	クザエモン	九左エ門
十	トクベイ	徳兵衛
千	センジロウ	千治郎
万	マンジロウ	万治郎
兆	チョウヨモン	長与門

今回はAさんの記憶をもとに表を作成した。屋号の漢字の表記を実際に確認できたのは、三在エ門、四郎ヲ門、徳兵衛であった。今後、漢字表記を調査していく。

表1はAさんの記憶に基づき屋号を示したものである。数字の語呂合わせと一致しないのが「七」の「ヒコエモン(彦与門)」である。だが、Aさんは、七(在所では「ひち」と言う)の「ひ」は「ヒコエモン」の「ヒ」にあたるかと考えている。また、十は「とう」と呼ぶために「トクベエ(徳兵衛)」の「ト」の音が用いられ、兆は「チョウジロウ(長治郎)」の「チョウ」の音が用いられたと推測している。

Kさん(1937年生 女性)の家の屋号は四郎ヲ門(シロヨモン)(表1参照)で、焼き印は「四」の印である(写真2)。

K家では、現在、焼き印を全く使わず、油性マーカーで名字を農具に書いている。だが、Kさんは、すでに名字が書かれているシャベルを持ってきて、Aさんに焼き印を押して欲しいとたのんだ。「ちようどええわ。まーちゃん(Aさんのこと)、はん押して」(K氏)。納屋から七輪を出してKさんが炭をおこすと、Aさんが印面を熱して、シャベルの柄に焼き印を押した(写真3)。筆者も何回か焼き印を押したが、印面を熱しすぎると押したときの燃え広がりがある。シャベルの丸い面に押すのはコツが必要である。私の焼き印は「四」の字が不明瞭で「四」と読めない。一方、A氏の焼き印は「四」が深く押されている(写真4)。「やっぱりまーちゃん(A氏)には勝てへんわな。長年たって使わんでも体に染み付いてるんやな」(K氏)。

現在、在所において屋号についてどのくらい認識があるのだろうか。生活のなかで屋号が使われる場面を見つけていることが難しくなっている。例えば、農具の所有者を示す際、焼き印では屋号を用い、油性マーカーでは名字を使うようになった。焼き印が使われなくなると共に、屋号の存在がなくなっていったと考えられる。在所において屋号とは何か。屋号の存在の有無は何を意味しているのだろうか。今後の研究の課題の一つとしたい。



写真2：K家の焼き印のデザインは「四」。四を刻んだ印の上辺2cm、下辺1cm、縦1cm。



写真3：A氏がK氏のシャベルの柄に焼き印を押す。



写真4：右は、Aさんが押した焼き印。左は、筆者が押した焼き印。

[1] 屋号とは家屋数の各戸につける姓以外の通称である。先祖名、職業名、家の本家・分家関係などによって呼び分けた。家名(いえな)、門名(かどな)とも言う(デジタル大辞泉)。

インドネシアでの「聞き書き」研修の試み

一般社団法人あいあいネット 島上宗子

この3年ほど、インドネシアの高校生を対象とした「聞き書き」研修をインドネシアで試みている。日本で10年にわたって「聞き書き甲子園」^{注)}を実施してきたNGO 共存の森ネットワークと連携した取り組みだ。うれしい“予想外”だったのは、インドネシアでもマチの高校生とムラの年配者が化学反応を起こす可能性がある、ということだ。日本で「聞き書き甲子園」が大きな拡がりとなり成果を生み出してきた背景の一つは、日本の高校生と自然を活かす知恵と技を持つ年配者（“名人”）との物理的・心理的距離と、距離があるからこそ出会ったときに起こる化学反応だといえる。

インドネシアのマチの若者にとって、農山漁村の暮らしは日本よりも身近だ。市場にいけば、近隣の村々から集まる野菜や鶏、手作りの竹^{ざる}筥や籠がごく当たり前にある。身近で当たり前だろうものに、高校生はどんな視線を向けるだろうか。便利な家電製品や道具が浸透しはじめている中で、農山漁村の知恵や技は「遅れたもの、価値の低いもの」として映りはしないのか。そんな懸念があった。

中スラウェシのパル市と西ジャワのボゴール市で研修を実施し、もしかしたら、何かが動き出すかもしれない、という手応えを感じている。ボゴールの高校に通うスチは、近くで山羊を飼う一人暮らしのおばあさんに聞き書きをした。「貧しくてかわいそう」と思っていたおばあさんが、自らの力で稼ぎ、子供を育て、日々を感謝して生きていることを知った。成果発表の会場で彼女は、「私

の“名人”、かっこいいんです！」と自身の発見と学びをいきいきと報告した。

聞き書きでは、語り手の言葉を録音し、一言一句書き起こすという地道な作業が必要になる。共通語であるインドネシア語に各地域の現地語が混じることの多いインドネシアでは、なおさら労力と根気が必要な作業だ。それでも、高校生たちはみな、深夜まで作業を続け、作品を仕上げにいった。パル近郊の高校に通うアニッサは「難しさをみんなと共有して、冗談をいって楽しめば、重荷も軽く感じられてくる。聞き書き最高！」と感想を残した。



写真2：聞き書きセミナーに参加した生徒と先生たち

インドネシアの高校生に「聞き書き最高！」と感じさせた要因は、農山漁村の“名人”との出会いだけではないだろう。高校生同士で協力しあったこと、日本にも同じように聞き書きに取り組む高校生がいると知ったことなど、いろいろあるだろう。インドネシアの高校生たちは、聞き書きのプロセスでICレコーダーやスマートフォンを使って録音し、パソコンで作品を仕上げにいく。研修に参加した者同士、フェイスブックで交流しあう。高校生たちは「新しいもの」を使いこなしながらも、「古いもの」をかっこいいと感じる感性を併せ持っていた。見方をかえれば、「新しいもの」と「古いもの」が交じり合うからこそ、おもしろく、最高だと感じられたのかもしれない。国境を越え、世代を横と縦につなぐことで生まれる気づきと可能性。インドネシアでの「聞き書き」の試みで再認識したことだ。



写真1：聞き書き作品に取り組むインドネシアの高校生

注)「聞き書き甲子園」：日本全国の高校生が森・海・川の名手・名人を訪ね、知恵や技術、人生そのものを「聞き書き」し、記録する活動。2002年から毎年100名の高校生が100名の名人を訪ねている。農林水産省、文部科学省、環境省などの政府関係機関とNPO 共存の森ネットワークが実行委員会を作り、企業協賛を得る形で実施されている (<http://www.foxfire-japan.com/>)。

催しのご案内

■ 京大生生存基盤科学研究ユニット・東南アジア研究所
京滋 FS 事業 第 65 回 実践型地域研究 定例研究会
日時 2014 年 4 月 24 日 (木) 17:00 ~ 18:30
場所 京都大学東南アジア研究所 稲盛棟 2 階 東南亭
内容 アジアと日本を結ぶ実践型地域研究の事例とその意義

発表者 安藤和雄 東南アジア研究所

★以上の催し物への参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。
京都大学 東南アジア研究所 実践型地域研究推進室
担当：安藤和雄 (ando@cseas.kyoto-u.ac.jp)

アジアと日本を結ぶ実践型地域研究の事例とその意義

——ブータンの人たちの佐々里集落滞在が 過疎・離農問題を考える契機に——

東南アジア研究所 安藤和雄

関西テレビの 10 分間の特集ドキュメント

2013 年 7 月の約 1 ヶ月間、ブータンのシェラブチェ大学から若手の講師男女各 1 名、若手研究員男女各 1 名の合計 4 名が、京都府南丹市美山町知井振興会、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室、京都大学の地 (知) の拠点事業 (COC) 「KYOTO 未来創造拠点整備事業——社会変革期を担う人材育成」や科研費「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」の支援をうけて、知井振興会参加の佐々里集落の農家民宿に泊まりこみ、定着型の参加型農村開発調査をアクションリサーチの一環で実施した。その時の 4 名の活動が 10 分間の特集ドキュメンタリーとして 9 月に関西テレビの夕方のニュースで放映された。その特集ドキュメントの DVD を見た京都大学大学院 ASAFAS (アジア・アフリカ地域研究研究科) の学生たち数名から、是非、美山町知井地区の佐々里集落を訪問したいという希望の声があがった。ドキュメントでは佐々里の空家や独居老人の状況をブータンの女性講師がブータンとの比較で分かりやすく指摘している。そのことに気持ちが動かされたのだろう。ラモさん (女性講師) 曰く「こんな立派な家があるのに……」「ブータンでは老人になれば子供にかえると信じられているので、老人は大切にされる……」「日本でこんな問題が解決されないでいるなんて……」等々。街に住む彼らにとって、過疎や離農の問題は、これまでそれほど強い関心事ではなかったのかもしれない。彼らにとってラモさんの声は映像やナレーション、キャスターのコメントとともに強く響いたのだろう。

50 年間大きな進捗がなかった過疎・離農の問題の現実

上記のニュース特集は、2014 年度の「地 (知) の拠点事

業」の私が代表をつとめるプログラム「アジアと日本の農山村問題を相互啓発実践型地域研究で学ぶ」の「まなびよし」の講義 (プログラム 2) 「自然と文化——農の営みを軸に——」 (ASAFAS の竹田晋也さんら) の一コマでも受講生 (京大の学部生) に 1972 年当時の日本の過疎の状況と、現在を比較する視点で見ってもらった。1972 年の記録は、竹田さんがネットでみつけてくれた。「全国過疎地域自立促進連盟 Kaso-Net」 (<http://www.kaso-net.or.jp/>、2014 年 6 月 23 日付) が提供していた、昭和 47 年 (1972 年) に作成された『【島根県匹見町】 荒れ果てる田、朽ちる家。27 軒が 2 軒になっても、あくまでも土に生きる』である。佐々里集落が立地する美山町の人口推移の図 1 を見せて、1960 年 (昭和 35 年) から 1970 年 (昭和 45 年) の 10 年間に、美山町でも急激に人口が流失している現状を伝え (美山町の人口は平成 24 年 11 月現在 4454 人、美山ナビ (美山町観光協会) <http://www.miyamanavinet/about-kyoto-miyama/>、2014 年 6 月 23 日付)、島根県匹見町 (2004 年に島根県益田市に合併編入される。最大人口は過去に 7500 人、現在は 2000 人、匹見観光協会 <http://hikimichou.com/index.php?id=41>、2014 年 6 月 23 日付) が決して特別な事例ではなかったことを伝えた。関西テレビの特集でも強調されていたのは独居老人であり、耕作放棄地、若者が村から出ていってしまったことである。まったく同じコメントが 1972 年の島根県匹見町のドキュメンタリーでもあった。私はこのことを学生たちに伝えたかった。いったい行政、学者などは何をしてきたのだろうか? 少なくとも半世紀が経過したにもかかわらずなぜこんなコメントが繰り返されるのだろうか? 学生たちの驚きもこの点にあったようだ。確かに過疎や離農の問題は一個人で解決できる問題ではない。私が美山町知井振興会にブータンの若手研究者の受入れを打診し、それを一つの契機として知井地区の再生活動につなげたいと希望を伝えると、2012 年の 12 月の雪の佐々里の民宿ハリマ家で、知井振興会の事務局長の河野賢司さんが「安藤さん、逃げないでくださいよ」と言われたことを、初めて経験した雪の佐々里の状況とともに今も鮮明に記憶している。河野さんのこの一言に半世紀の重みを感じる。

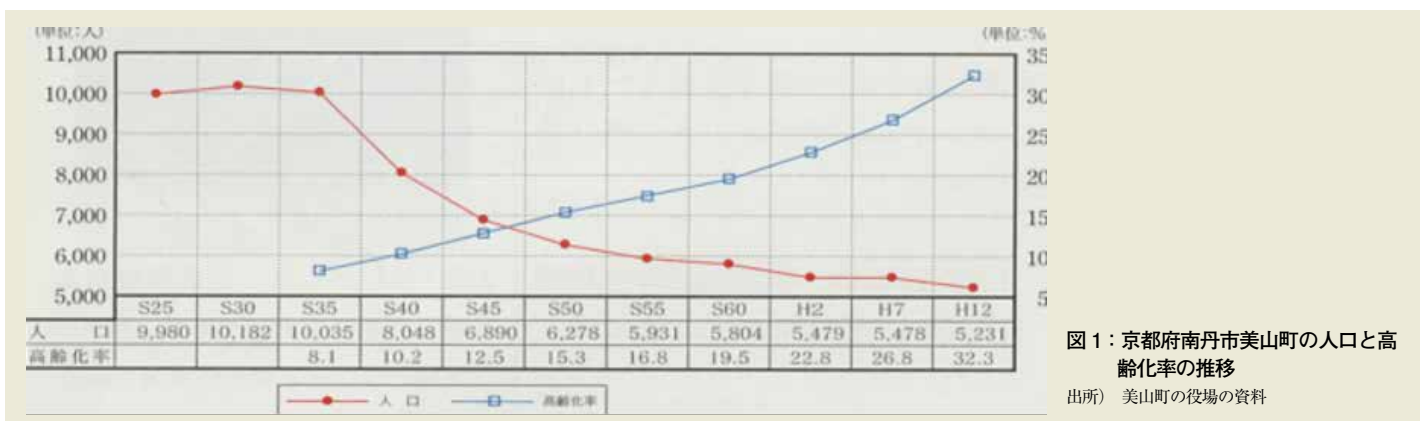


図 1：京都府南丹市美山町の人口と高齢化率の推移
出所) 美山町の役場の資料